

種子島実習事後レポート

◆ 種子島実習の感想



市立病院への急患の搬送を見学

私は、種子島医療センターと田上病院で実習をさせて頂いた。まず、種子島医療センターでの実習をしたときに最も印象に残ったのは、病院内の様子が鹿児島市内の主要な病院とほとんど変わらなかったことである。病院長の高尾先生から説明があったのだが、種子島医療センターは検査時間が短く精度も高い 320 列 CT を導入しているとのことだった。医療機器だけにとどまらず診療科の数も充実していて、若い医師や大学病院から手伝いに来ている医師、研修医も多かったのも、とても驚いた。しかし一方で、消火器内科の常勤医師は一人しかおらず勤務時間外に呼び出されることもあるそうなので、十分に医師が足りているわけではないと感じた。他にも、種子島医療センターにはサーフィン部やゴルフコンペなどスポーツのクラブが豊富にあり、多くの医療スタッフが所属しているとのことだった。医療センターに勤めている医療スタッフももともと県外から来たマリンスポーツ好きが多らしく、スタッフがリフレッシュしやすい環境が整えられているように感じた。田上病院は種子島医療センターから離れたところ（中種子）に位置していて、小さな病院だなと思ったのが正直な感想だった。実際に病院内で外来の見学をさせて頂いたが、田上病院は午前中は毎日内科、午後は専門科が約 1 週間ごとにローテーションするといったシステムであった。種子島医療センターと違うように感じたのは、患者さんと医療スタッフの距離、患者さんの年齢層、そして医療スタッフの年齢層である。患者さんは、患者さん自身の体調のこのみではなく、患者さんの家族のことを話していたり冗談を言っていたりしていた。患者さんのほとんどは 70 歳以上で、90 歳を超える患者さんもいた。また、実習でつかせて頂いた医師本人が言っていたことだが、医師の高齢化が進んでいるとのことだった。確かに種子島医療センターに比べて、医療スタッフの年齢は高かったように感じる。種子島は南北に長い形をしていて、設備が充実している種子島医療センターは北の方に位置しているのも、中種子、南種子に住む人々には十分な医療が提供されていないと感じた。医療施設はあるものの、まだ課題は残っているように感じた。

◆ 俳句

炎天下 気分は良かか？ 患者訪う

訪問看護に同行した際、暑さの中それぞれ離れている患者さんの家を一軒一軒訪ね、患者さんの体調を気遣う様子を見て考えた。看護師さんの使う種子島の方言にも、温かみや、医療スタッフと患者さんの距離の近さを感じたので、このように詠んだ。

地域枠実習

私は、今回の地域枠実習を種子島で行った。昨年は自身の生まれ故郷でもある奄美大島での実習を行い、離島医療について学ぶことが出来た。今年は鹿児島本土の僻地での実習も考えてはいたが、奄美大島以外での離島ではどのような医療が行なわれているのか気になり、種子島での実習を決めた。

今回の実習ではほとんどの実習を種子島医療センターで行った。種子島医療センターは私が想像していたよりもかなり大きな病院で、ほとんどの手術はセンター内で行うことが出来る。また、働いている医師、看護師の数も多く、あまり離島医療というものを感じさせないものであった。

種子島医療センターのモットーは「島民に信頼される病院」であり、診断・治療だけでなく、患者さんのリハビリテーションにも力を入れていた。また、市内の提携病院との結びつきも強く、電子カルテなどで患者さんの情報を共有し、治療に当たっていた。

種子島医療センターでは、患者さんに対してのサポートだけでなく、働いている医師たちへのサポートにも力を入れていて、クラブ活動などを通して従業員同士での結びつきを強め、また精神的な支柱ともなっていた。

種子島医療センター以外では、田上診療所を訪れた。ここは県の指定された僻地診療所であり、島民の生活を担う拠点となっていた。常勤医師は内科医師1名で、その他の専門科に関しては、種子島医療センターから日替わりで医師が派遣されていた。昨年までは有床であったが、今年からは医師の体調面の都合により、無床となった。

田上診療所には、中種子町にあり、種子島医療センターからは車で1時間ほどかかる。そのため長時間の移動のできない人や、高齢者が多くいた。医師から聞いた話では、種子島の島民の方々は人にご飯を進めることが多く、糖尿病を患っている患者さんが多いとお話されていた。糖尿病は生活習慣病であるため、医師たちもその患者の日常にまで踏み込んで医療を行うことが求められているのだと感じた。

種子島医療センター・田上診療所ではともに外来見学を行った。奄美大島の際にも感じたが、やはり医師と患者さんとの距離感が近く、病気を診ているのではなく、人を診ている。つまり、患者さんの家族・生活にまで踏み込んだ医療を行っていると感じた。種子島の方々の気質なども穏やかでお柄かな気質であった。そのため、患者さんも医師に多く話しかける様子が見られ、信頼関係を気づきやすいように感じた。

私は「島民の 未来を担う 種の島」と読んだ。種子島には多くの若い方々がおり、そのひとりひとりがこれからの種子島を担っていく人材なのだと感じた。そういった方々を支える医師の姿を見てこの俳句を読んだ。